Title	女性論における聖書の視座 : 第一テモテ書二・八～十五の問題
Author(s)	阿部, 洋治
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume2, 1987.6 : 72-81
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3267
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

女性論における聖書の視座

――第一テモテ書二・八～一五の問題――

宗教主任代行　阿部洋治

一　「女は静かにしていて、万事につけ従順に教を学ぶがよい。女が教えたり、男の上に立ったりすることを、わたしは許さない」（才一テモテ二・一一～一二）。これは、使徒パウロが、弟子のテモテに書き送った書簡の一部に記された言葉である。また、彼は、別の書簡においても婦人の問題にふれ、「婦人たちは教会では黙っていなければならない。彼らは語ることが許されていない」（才一コリント一四・三四）、と述べている。さらに、「もし何か学びたいことがあれば、家で自分の夫に尋ねるがよい。教会で語るのは、婦人たちにとっては恥ずべきことである」（同一四・三五）、と大変厳しい警告を与えている。

聖書にこのような言葉が記されていることに、少なからざる驚きを覚える人も少なくないであろう。一見する限り、これらの言葉においては、女性が男性よりも低く見られているように思われる。実際、聖書のこうした女性観の故に、女性を教会の指導者としては認めない、という教会もあるようである。しかし他方、これは、女性が蔑視されていた

時代のパウロの女性観を表わしたものであるから、今日の我々は、あまりこうした考え方にこだわる必要はない、と考える人たちもある。確かに、聖書も人間によって書かれたのであって、その限りでは、一つの時代の産物である。それだけに、書いてあることをそのままに受けとったのでは、現代に通用しないような事柄も少なくはない。しかし、単に、現代にあわないからという理由で、その部分を除外するとしたら、それは、聖書の正しい読み方とは言えない。逆にまた、聖書の言葉を表面的な字義どおりに理解し、それを現代に適応するということも、正しくはない。何故なら、その場合は、聖書が一つの時代の産物であって、一つの時代の価値観や用語法の制約の下にあるという事実を無視することになり、聖書が伝えようとしているメッセージを正しく受けとめることにはならないからである。

我々の立場は、現代の価値観を絶対化して、それに基づいて聖書の内容を取捨選択するというのではなく、また、聖書（すなわち文字）を絶対化して、聖書の価値基準に我々のあり方をあわせて行くというものでもない。以上のどちらの場合も、聖書をすでに閉ざされた書として見ている点で共通する。すなわち、もう死んだ文書としてしか見ていない。しかし聖書は、開かれた生きた文書であり、今もなお読む者に語りかけないではいない。その立場から、特に、テモテへの第一の手紙二章八～一五節におけるパウロの記述に注目をしてみたい。

二　ところで、今ここで、我々はパウロの女性観に直面しているわけなのであるが、この箇所についての吟味の前に、他のところでパウロが女性問題についてどのように言及しているかを見ておきたい。たとえば、ガラテヤ人への手紙では次のように記されている。「もはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである」（三・二八）。我々のテーマに関係した点に限定して言えば、パウロは、ここで、「もはや……男も女もない」と述べている。ユダヤ教の祈禱書の一節には、「この世の王でい

ましたもう主なるわが神よ、汝に祝福あれ。……汝は我を女に造りたまわざればなり」とあったようであるが、これは明らかに女性を蔑視した祈りと言わなければならない。これに対してパウロは、ここで、もはや男であるか女であるかによって分け隔てはされないと述べているのである。もちろん、男か女かの違いは無視されてはいないが、男であるから尊ばれ、女であるから貶まれるということはないのだ、というのである。パウロは、また、他のところでは、「男なしに女はないし、女なしに男はない。それは、女が男から出たように、男もまた女から生まれたからである。そして、すべてのものは神から出たのである」（才一コリント一一・一一―一二）とも述べている。

さらに我々が注目しなければならないのは、パウロが実際に婦人に対してどのような接し方をしているのか、ということである。たとえば、ローマ人への手紙一六章には、友人たちへの挨拶の言葉が記されているのであるが、そこには幾人かの婦人の名前が登場して来る。「ケンクレヤにある教会の執事、わたしたちの姉妹フィベをあなたがたに紹介する。どうか、聖徒たるにふさわしく、主にあって彼女を迎え……てほしい」（一六・一～二）とある。むしろここでは、女だからといってこの姉妹を軽んじるようなことはしないでほしい、というパウロの配慮がなされているのである。さらに、この他にも、プリスキラ（一六・三～四）、ツルパナとツルポサ（同一二）、ルポスの母（同一三）、ユリヤそしてネレオの姉妹たち（同一五）に言及されている。パウロは、こうした婦人たちのことをわざわざ記して、「よろしく言ってほしい」と述べているのである。少なくとも、ここには、「女は静かにしていて、万事につけて従順に教を学ぶがよい。女が教えたり、男の上に立ったりすることを、わたしは許さない」というような響きはないのである。むしろパウロは、婦人たちの苦労を覚えながら感謝の挨拶を送ろうとしているのである。

このように見て来ると、我々が問題にしようとしているテモテへの手紙においてパウロが記していることは、何か特殊な事態の中にあったエペソの教会の婦人たちを念頭においてのことであったと言えないだろうか。つまり、弟子

のテモテが遣わされている教会の婦人たちの状態を思うとき、パウロは、どうしても彼女たちに謙遜を要求しなければならなかったのではなかったか。もしそうではなくて、パウロがここで女性一般について言及し、女性たる者はすべて、教えてはならない、ということを述べているとすれば、今見て来たように、他の箇所でのパウロの記述との内容的な矛盾に直面せざるを得なくなるのである。従って、テモテへの手紙におけるパウロの厳しい発言は、女性一般に対するものではなく、特に、テモテが遣されているエペソの教会の婦人たちの堕った状況を念頭において語られたものと見ることが、妥当ではないだろうか。

そうだとすれば、エペソの教会の婦人たちの状況はどんなものであったのだろうか。その状況を明らかにしながら、パウロがどうしてあのような厳しい発言をしなければならなかったのかを考察したいと思う。

三　パウロは、弟子のテモテに対して、何らかの具体的事態とは関係なく、ただ一般論としてだけ、教会員たちをどのように牧会すべきかということを書き送っているのではない。そうではなく、問題は、教会のエペソの町で活躍を始めたにせ教師たちにかき乱されるという事態にあった。パウロは、そうした緊急の事態にどう対処すべきであるかを、若い伝道者テモテのために記しているわけなのである。このことは、テモテへの第一、第二の両書簡を一読すれば明らかなことである。

さて、それでは、このにせ教師たちはどういう人たちであったのか。この点についての詳しいことは知り得ない。しかし、テモテに宛てられている二つの書簡から、ある程度の輪郭をとらえることは可能である。

エペソのにせ教師たちは、聖書の読み方を誤り、聖書に基づきながらも、「作り話しやはてしのない系図などに気をとられ」（第一テモテ一・四、またテトス一・四～一六、三・九を参照）ていた。そして彼らは、律法の教師であ

ることを志しておりながら、真理を追い求めることからはほど遠く、ただ「論議を引き起させるだけ」（同一・四）であった。ただ人々との論争を好むだけで、自分たち自身が何を議論しているのかわからないような空論に走っていた（同一・六～七）。また彼らは、ある種の禁欲主義を主張し、結婚を禁じたり、またある種の食物を断つことなどを説いていた（同二・三）。

一見するところ知的なこのにせ教師たちの論議は、特に、エペソの町の裕福な婦人たちをとり慮にした（第二テモテ三・一～九）。彼女たちは、自分たちのひまをつぶすために、好みにまかせてにせ教師たちを寄せ集め（同四・三）、空しい論議に耳を傾けていたのである。当然のこと教会に集って来ていた裕福な婦人たちもこの影響を受けないではいなかったのである。

彼女たちは、若い伝道者テモテの教えには同意しなかった。というよりは、ただ議論をすることを好むだけであって、テモテが語ろうとすることを真剣に聞こうとはしなかったのである。彼らは、「ただ論議と言葉の争いとに病みついている者」たち（第一テモテ六・四）であった。そういうわけであるから、また次のようにも記されている。「彼女たちは、常に学んでいるが、いつになっても真理に達することができない。……彼らは知性の腐った、信仰の失格者である」（第二テモテ三・七―八）と。

にせ教師たちの悪い影響は、若いやもめたちにも及んだ。彼女たちは、にせ教師たちの教えに基づき、結婚をすることを望まなかった。しかし、その反面では、性的な不道徳に陥っていた。こうしたみだらな生活をしている彼女たちについて、パウロは、「生けるしかばねにすぎない」（第一テモテ五・六）と述べている。彼女たちは、さらに、家族に対する責任を放棄した（同五・八）。それに加え、やもめとして教会の世話になろうという態度であった（同五・一六）。また彼女たちは、仕事をするというのではなく、家々を遊び歩き、にせ教師たちの教えを語りながら、

いたずらに動きまわっていたのである（同五・一三）。

にせ教師たちによる悪しき影響は、もちろん、婦人たちに限られたものではなかったであろう。教会員の中には、もうイエス・キリストの十字架の福音に耳を傾けないという者も現れ、彼らは、福音に聴き従う謙遜の道ではなく、自分の知識を誇る高慢の道を歩み始めていた。パウロの言葉によれば、彼らは、「何もしらず、ただ論議と言葉の争いとに病みついて」いた（第一テモテ六・四）。そうした論争からどんな成果が与えられたことだろう。言うまでもなく、何らよきものは生れなかった。続いてパウロは記している。「そこから、ねたみ、争い、そしり、さいぎの心が生じ、また知性が腐って真理にそむき、信心を利得と心得る者どもの間に、はてしのないいがみ合いが起るのである」（同六・五）と。

以上が、八～一五における忠告の背景であったと考えられる。ところで、以上は、テモテに向けられたパウロの二つの手紙全体からの想像にすぎない。しかし、このことと関係して注目されるべき事がある。それは、八節には、「それだから」という接続詞が記されている点である。日本聖書協会訳では、それが訳されていないので、八節以下は、一～七節とは関係なく唐突に記されている感がなくはない。しかし原文では、「それだから」という接続詞によって、一～七節の内容と八～一五節の勧告とが関連していることが明らかなのである。

一～七節の中心点は何か。それは、教会は、「すべての人たちのために……願いと、祈と、とりなしと、感謝をささげる」（一）べきところだ、ということである。しかし、現実のエペソ教会は、すでに見て来たとおり、そうではなかった。人々は、他者のために祈りをささげるというのではなく、ただ論争に明け暮れ、ひいては、はてしのないいがみ合いの状態にあったのである。そこには、真理を求める「安らかさ」も「静かさ」（二）もなかった。こうした教会の有様は、教会外の人々にどのような印象を与えることであろうか。おそらく、人は誰も、こうした教会が欠

くことのできない真理を土台として建てられているとは考えないことであろう。しかし、教会は、「真理の柱、真理の基礎」（第一テモテ三・一五）であり、それゆえに、「神は、（この教会をとおして）、すべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられるのである」（二・四）。

以上が、一～七節の中心的な内容である。そして実は、これとの関係で、より具体的に八節以下の勧告が述べられるわけなのである。つまり、エペソの教会が、教会の実質を回復するために急を要する具体的な問題が取り上げられているわけなのである。それにしても、男については八節だけであるのに対し、女については九～一五節までの長い文量になっているということは、やはり、にせ教師たちは教会の裕福な婦人たちに大きな影響力を与えていたということを物語っているものと思われる。

四　ところで、一三～一五節においてパウロは旧約聖書を引用して、女が教えたり、男の上に立ったりすべきではない（一二）という事を論証しているように見える。しかしこの点については、少し注意を要することである。アラン・パジェット（Alan Padgett, Wealtly Women at Ephesus, I Tinothy 2:8～15 in Social Context, in Interpretation 1987, pp 25-26）によれば第一世紀のユダヤ教にはいろいろのタイプの聖書解釈があったが、おそらく、パウロはここではミドラシュ的解釈の方法を取ったらしい。つまり、ミドラシュ的解釈の特徴は、自分たちの状況において旧約聖書の歴史を読むということである。そしてパウロは、特に、このミドラシュ的方法を警告的な仕方において用いているのである。その場合、パウロは、旧約聖書のタイプを単に警告的な意味で消極的な意味で用いているのであり、決して状況とは関係のない絶体的不変の真理を語るためではないのである。

その具体的な例は、コリント人への第一の手紙一〇章一～一五節である。民たちはモーゼとの契約関係において与

えられたすべての恵みにもかかわらず、神を讃めたたえることをせず、偶像崇拝や悪しき欲望に陥ったのである。そしてそれ故に、民たちの大多数は荒野で滅ぼされてしまった。パウロは、これについて、「これらの出来事は、わたしたちに対する警告であった」（一〇・六）と述べている。つまりパウロは、旧約の民の出来事を、現実のコリント教会の状況にひきあてながら、一つの警告を与えようとしているのである。パジェットによれば、ローマ書五・一二のアダム、九・一七～一八のパウロなども同様のタイプに属するものと見ている。もし、パウロの旧約聖書の用法についてのパジェットの説が正しいならば、パウロは、第一テモテ二・一三～一五において、女というものが男よりも低く取り扱われるべき根処を旧約に見ているというのではなく、エヴァの失敗を例にして、現に、にせ教師たちの誘惑の下にある婦人たちに警告を与えている、ということが明らかにされるわけなのである。そうであれば、ここでパウロは、男と女との創造の秩序、すなわち、婦人に対する男性の優位性を述べているのであるという解釈は成り立たなくなるわけなのである。

さて、ところで、十五節でパウロが、「女が慎み深く、信仰と愛と清さとを持ち続けるなら、子を産むことによって救われるであろう」と言うとき、いったい、彼はどんなことを考えていたのであろうか。彼は、女というものは、子を産み育てるためにのみ存在するものなのだ、と考えていたのであろうか。

この点に関しても、今見て来たような旧約理解の線で解釈することができるであろう。ただ、前半はエヴァを消極的面から引用していたのに対して、ここでは彼女の積極的面をエペソの婦人たちとの関係において見ているのである。創世記三・一五によれば、エヴァの子孫が悪魔を足の下に踏み砕くと約束されている。救済史的視点から見るならば、まさに、エヴァの子孫であるイエス・キリストによってサタンは砕かれた（ローマ一六・二〇）のである。この意味でエヴァは、サタンに誘惑されるという罪にもかかわらず、子を産むことにおいて、自分が救われただけでなく、す

べての民を祝福する（創二二・一八）ことになる歴史の出発点に立つことになったのである。

パウロは、このエヴァを例にして、エペソの婦人たちが結婚して子を産むことの重要性を訴えているのである（第一テモテ五・一四参照）。エペソの裕福な婦人たちは、にせ教師たちに従って、結婚を汚れたものとし、また人は家族に対する義務を拒否すべきだと考えていた。しかしパウロは、婦人たちに神によって与えられた家庭における役割に帰ることの必要性を説くのである。もちろん、パウロは信仰による救いを無視して語っているのではない。しかし、創造と救済における女性の役割は栄光と誉れに満ちたものであることを、パウロは語りたいのである。

これと関連して重要なことは、パウロは、ガラテヤ人への手紙において、キリストをアブラハムの「子孫」（三・一六、一九）というふうに呼び、また、「女から生れさせ」（四・四）というふうに言及していることである。つまりパウロは、創世記三・一五を救済史の角度から見ており、それゆえに、マリヤはサタンを砕く子孫の預言を成就したものと見ていることが、ここから明らかである。

このように、パウロにとって、女性が子どもを産むということは、単に生理的事柄ではなく、救済史に関わる事柄なのである。それは軽んじられるべきものではなく栄光に満ちたものであり、神はそれによって我々すべてを救うために選ばれた方法なのである。ここにおいて、我々は、信仰に基づくパウロの女性論を見ることができる。しかし、それは論というよりも、救済史的視野からの女性の役割に対する驚きと感謝を根底とした認識というべきものである。

しかし、今のパウロにとって、重要なことは、結婚問題そのものではないのである。結婚は祝福されるものであるが、結婚が救いのための絶体的条件ではあり得ない。重要なことは、結婚を軽んじるにせ教師たちから離れることである。エペソの婦人たちの救いは、このことにかかっているのである。

五　以上の考察を基に、我々は、パウロが決して女性を男性の下に位置づけ、また子を産むための機能としてだけ固定しようとしているのではないことを確認したい。しかしまた、パウロの女性観は、現代の女性解放運動家たちによってなされる女性論とも異なる。十分に詳しく論述する余裕はないが、彼らの女性論は、抑圧する力に対する消極的な意味での女性解放の論理ではあり得ても、深い意味ですなわち積極的意味での解放の論理たり得てはいないのではないか。たとえば、そこでは、女であるということが、どれだけ真剣に受容されているであろうか。そこでは、しばしば、女であるということが、男であることに比べあまりに犠牲の多いことだというふうに、極めて消極的にしか受けとめられていないのではないか。たとえば、具体的に、結婚をして子を産み育てるということが、どのような深みからとらえられているのであろうか。

男であること、女であること――つまり、性の問題は、深く神学的な問題である。ということは、単なる思いつきや経験では論じられず、神の創造に対する深い驚きと感謝のないところでは、あのにせ教師たちのように結婚を軽んじてみたり、あるいは、その反対に結婚を絶体化して、結婚をしていない人を差別するような発想しか生れないであろう。性の問題を取り扱うためには、自由でありつつ、しかし本当の謙遜を必要とすることなのである。惜しむべくは、今日においても、この謙遜が失われていることである。その点に関する限り、あの裕福なエペソの教会の婦人たちを、もう過去の人たちとはできないのではないのか。